

『資本論』の論理——貨幣または商品流通——(1)

Logik des *Kapitals*

川崎 誠*

(一)

「iPS 二枚舌もつくれるよ」

ラジオの時事川柳に紹介された新作である。インターネットでは現首相¹⁾の過去の演説が出回っているようで、「マニフェストはルールがある。書いてあることは命懸けで実行する。書いてないことはやらないんです」「シロアリ退治しないで、消費税引き上げなんですか？」といった三年前の野党時代が動画に映されているらしい（『東京新聞』2012年10月17日）。新作川柳もそのあたりを詠んだものだろう。

数年前の長期政権以来、この国に言葉を軽んずる傾向は顕著になったのではないか。若年に得た特権的な地位について尋ねられ、時の総理大臣は「人生いろいろ」と居直って追及をはぐらかした。そして国民の人気とマスコミの迎合はその言葉に喝采を贈りさえした。一国の総理の言葉が軽ければ、それに倣う者が出るのは必定。品格を疑われた横綱は、「横綱とは如何なるものか」との質問に「自分が横綱だ」と答えて反省の色はなかった。もっともこの横綱に対しては、国民とマスコミは必ずしも好意的でなかったようだが。ともあれ総理大臣と横綱と、いずれも「無理」を以て「道理」を屈服せしめた感がある。

大学もまた軽い言葉の蔓延と無縁ではいられないようだ。教授会で長期研究員が挨拶し、「一年間骨休めです。研究する気は毛頭ありません」と公言したのには驚いた。空疎な研究意欲の表明を苦々しく思い、自らは「正直」であることに潔さを込めたつもりかもしれない。ただし同じ挨拶を例えば育友会の場でなしうるとは思えないから、やはりそこには不実の臭いがする。研究員の選出は審議事項である。研究放棄の宣言は自分たちへの背信になるはずだが、いまや咎める者としてない。言葉は論理だから、言葉の軽視は論理の軽視であろう。「ロジカル・シンキング」なるものが強調されるようになったのも、言葉を軽んずる風潮が過度になり、それを危惧する意識の現われであっ

*専修大学経営学部教授

たろうか。しかし根っこの^{ロゴス}言葉が軽いものである以上、^{ロゴス}論理の強靱であろうはずもない。「ロジカル・シンキング」を学生に身に付けさせたいと思うなら、「まず魁より始めよ」、教える側の言葉が重みをもつのでなければ適うまい²⁾。

繰り言は止め、論理的な思索に学ぶことにしよう。具体的には『資本論』の「貨幣または商品流通 Das Geld oder die Waarencirkulation」の章だが、私はそこに同語反復と矛盾との複雑な絡み合いを見出す。それは「ノルウェーでムーアに対して口述されたノート Notes dictated to G.E. Moore in Norway」——以下「ムーア」と略す——でのワイトゲンシュタインの次の叙述を思わせる。

108h 一般に、通常の論理学で与えられる記述は同語反復の記述である As a rule the description given in ordinary Logic is the description of a tautology ; しかし他の記述、例えば矛盾の記述も、まったく同様に示すことができる。but others might shew equally well, e.g., a contradiction.

「ムーア」について幾らか述べておこう。弱冠24歳の大学院生が自らの思索を口述し、それを名門大学の哲学教授が筆記する。一見すればあべこべを疑わせるこの出来事は、およそ100年前、1914年4月ノルウェーでのことであった。その大学院生がワイトゲンシュタインであり、筆記した哲学教授はケンブリッジのG・E・ムーアである。ワイトゲンシュタインにとっては外国語である英語でなされたこの口述筆記には、前期ワイトゲンシュタインの主著『論理哲学論考』——以下『論考』と略——に直結する思索が見出され、またソシュール『一般言語学講義』の刊行に先立つ時期に、ワイトゲンシュタインがソシュールに通う思想をすでに抱いていたことをもうかがわせて、興味の尽きることはない。

ともあれ上の引用に戻れば、冒頭の「108h」は「ムーア」を「付録2」に含む『Notebooks 1914-1916』第二版 (Basil Blackwell) の頁数とパラグラフ番号である。つまり「108h」は「p. 108の第八パラグラフ」を表わす。さて、その108hは「同語反復」と「矛盾」について言及し、しかも両者の「記述」が「通常の論理学で与えられる」と説く。私の理解するところでは、これは『資本論』第三章の論理展開についても妥当すると言え、以下にその次第を説いてみようと思う。

(二)

『資本論』の読解に先立ってブレイン・ストーミングである。「同語反復」すなわち「AはAである」。するとAはそれ自身との単一な同一性であるから、これを分析することができる。

xはAである。

Aはxである。

ゆえに、AはAである。

だがこれは直接には媒概念曖昧の虚偽 Sophisma figurae dictionis を犯している。カントが説いている。

大前提において問題になっている存在者は、一般にあらゆる観点から考えられることのできる存在者、したがってまた直観において与えられうる通りに、考えられることのできる存在者である。Im Obersatze wird von einem Wesen geredet, das überhaupt in jeder Absicht, folglich

auch so wie es in der Anschauung gegeben werden mag, gedacht werden kann. けれども小前提において問題になっている存在者は、思考および意識の統一にかんしてのみ自己自身を主語と見なすが、しかし同時に直観にかんしては、すなわち存在者がそれによって思考に対して客観として与えられる直観にかんしては、自己自身を主語と見なすことのない存在者にすぎない。Im Untersatze aber ist nur von demselben die Rede, so fern es sich selbst, als Subjekt, nur relativ auf das Denken und die Einheit des Bewußtseins, nicht aber zugleich in Beziehung auf die Anschauung, wodurch sie als Objekt zum Denken gegeben wird, betrachtet. (『純粹理性批判』上 p. 476)

だから大前提「xはAである」におけるAは「客観一般（したがって、直観において与えられるような客観）」だが、小前提「Aはxである」におけるAは客観的な「物」とは言えない（同）。具体的なイメージを得べく、廣松渉から引用する。

福田赳夫伝の第二頁に出て来る赤ん坊を「これは福田だ」と認知するのは、老福田と類似の面影を看取するからではない。類似性を根拠にして福田と呼ぶのであれば、——嬰兒福田と老人福田との面影上の類似度に比べて、はるかに——類似の度合が強い人物は幾らでも居るのであるから、それらの人物をことごとく福田と呼ぶべきことになってしまおう。(『もの・こと・ことば』 p. 152)

ここで「Aはxである」のAは「福田赳夫伝の第二頁に出て来る赤ん坊」であり、つまり^{センス・データ}感覚与件である。嬰兒福田の面影は、その老人福田との類似度に比べては他の嬰兒との類似度がより大であろう。そうであれば「福田赳夫伝の第二頁に出て来る赤ん坊」を「直観において与えられる通りに、考え」て「福田」と呼ぶことはできないはずである。

では廣松がその「赤ん坊を「これは福田だ」と認知する」のは如何様にしてであろうか。曰く

私の直接的な認知に即するかぎり、およそ類似していなくとも、世人が——一定の根拠をもって——赤ん坊の姿で写っている人物と老人の姿で写っている人物とを同一の「福田赳夫」と呼ぶことに追隨して、これらおよそ別物にしか思えないものを、私も同じ「福田」と呼ぶだけの話である。(同)

ここで「世人」における「一定の根拠」——すなわち「規定された根拠 der bestimmte Grund」——とは、例えば「福田赳夫伝」中に存する写真はすべて「福田」の写真であるべきだ sollen³⁾、というようなことである。すると廣松が直接的に認知する「福田赳夫伝の第二頁に出て来る赤ん坊」は「福田赳夫伝」中の写真の一部であるから、したがって「福田」の写真である、という次第——「赤ん坊」の写真はいわば「福田」になるべきもの・当為であり、それは「規定されて制約する媒介 die bedingende Vermittlung になっている」(『大論理学』 p. 134) ところの根拠関係が前提する「直接態」・「制約 Bedingung」である。ただし当為が当為にとどまる限り、「直接的なもの」は「制約であることに対して無関心的である」(同 p. 135) のだが——。

そこで「AはAである」に戻れば、ここから導かれる「AであるA」は二つのAをその「一部」

とするとところの「すべて」である。というのは、「AであるA」は「(Aである) A」でありまた「A(であるA)」であるから。すると「Aはxである」のA・すなわち「(Aである) A」が「A(であるA)」なのであるから、ここでは媒概念曖昧の虚偽を犯す誤謬推理を免れている⁴⁾。かくして同語反復「AはAである」を記述することができた⁵⁾。

(三)

さてウイトゲンシュタインは108hの後半で、「しかし他の記述，例えば矛盾の記述も，まったく同様に示すことができる」と説いている。実はこの点の了解を本稿はすでにしている。数十年間での風貌の変化ゆえに，認知者の直観に基づく限り「赤ん坊は福田ではない」。それにもかかわらず「赤ん坊を「これは福田だ」と認知する」のは，直観を直接に「一定の根拠」に結び付けるからである（直接的反転 *unmittelbare Umkehrung*）。だがかかる形式的な同一性はそのゆえに矛盾する⁶⁾——「赤ん坊は福田である」・「老人は福田である」，したがって「赤ん坊は老人である」。ここでは「赤ん坊」・「老人」と「福田である」こととが形式的に区別されているにすぎない——。ただし具体例に拠って了解することとその論理を把握することは同じではない。同語反復から矛盾へ至る道筋を論理的に辿ることは依然難路として残されている。しかし幸いなことに、『資本論』が具体的なイメージとともにその道筋を辿っており，その鮮やかな論理展開に学ぶことができる。

はじめに全体の見通しを立てておこう。まず「商品流通あるいは貨幣」章は次に挙げる節以下の区分をもつ。

第一節 価値の尺度 *Maß der Werthe*

第二節 流通手段 *Cirkulationsmittel*

- a 商品の変態 *Die Metamorphose der Waare*
- b 貨幣の通流 *Der Umlauf des Geldes*
- c 鑄貨。価値章標 *Die Münze, das Werthzeichen*

第三節 貨幣 *Geld*

- a 蓄蔵貨幣の形成 *Schatzbildung*
- b 支払手段 *Zahlungsmittel*
- c 世界貨幣 *Weltgeld*

そして私の読みでは、「商品流通あるいは貨幣」章はその全体がヘーゲル『大論理学』の「本質的相関 *Das wesentliche Verhältnis*」章に対応しており，前者の三つの節は後者のやはり三つの下位区分に照応する。「本質的相関」章の下位区分は次である。

- A 全体と諸部分との相関 *Das Verhältnis des Ganzen und der Teile*
- B 力とその発現との相関 *Das Verhältnis der Kraft und ihrer Äußerung*
 - a 力が制約されてあること *Das Bedingtsein der Kraft*
 - b 力の誘発 *Die Sollizitation der Kraft*
 - c 力の無限性 *Die Unendlichkeit der Kraft*
- C 外のものと内のものとの相関 *Verhältnis des Äußeren und Inneren*

すると容易に予測されることは『資本論』の第一節が『大論理学』のAに、第二節のa・b・cがBのa・b・cにそれぞれ対応することである。『資本論』第三節の下位区分a・b・cは『大論理学』Cに対応する区分をもたないかに見えるが、そうではない。後者Cは表題こそ付かないがやはり三区区分されており、それぞれが第三節のa・b・cに対応しているのである。具体的な読みに入る以前には、以上の対応は形式的なものにすぎないのだが、一応の目安を得ることはできるだろう。

(四)

はじめに『大論理学』に謂う三つの相関を概観するが、そのためには「本質的相関」の概念を把握せねばならない。それは次のように説かれる。

現象の真理態は本質的相関である。本質的相関の内容は直接的な自立態をもっている、しかも実に存在的な直接態および反省した直接態・ないしは自己と同一的な反省をもっている。同時にその内容はこの自立態において相対的な内容であり、端的に自分の他者への反省として・ないしは自分の他者との関係という統一としてのみある。この統一においては自立的な内容は定立されたもの・揚棄されたものである；しかしまさにこの統一が内容の内的存在および自立態をつくりなしている；この他者への反省は自己自身への反省である。相関は、他者への反省であるから、[二つの]側面をもっている；こうして相関は自分自身の区別を自分のもとにもっており、そしてこの区別の[両]側面は自立的存立である、というのはそれらはそれらの相互に対する無関心的な差異性のうちで自己自身へと折り曲げられているからである、そしてその結果、それぞれの側面の存立はまた同じくただその意味を他方の側面への関係のうちに・換言すれば両者の否定的統一のうちにもっているにすぎないのである。

それだから本質的相関は、なるほどまだ本質と現実存在とに対する真の第三のものではないが、しかしすでに両者の一定の合一を含んでいる。本質は本質的相関において実在化されており、自立的に現実存在するものどもを自分の存立としている；また自立的に現実存在するものどもはそれらの無関心態からそれらの本質的統一へと還帰しており、その結果、それらはもっぱらこの統一だけを自分たちの存立としている。肯定的なものと否定的なものという反省規定も、同様にそれぞれの反対のものへと反省したものとしてのみ自己自身へと反省した反省規定であるが、しかしそれらのこの否定的統一以外のいかなる規定をもっていない；これに対して本質的相関は、自立的な総体性として定立されている[両]規定を自分の[両]側面としてもっている。本質的相関は肯定的なものと否定的なものとの対立とおなじ対立であるが、しかし同時にひっくりかえった世界としての対立である。本質的相関の[両]側面は総体性であるが、しかしこの総体性は本質的に対立したものとして自分の彼岸をもっている；この彼岸の現実存在はむしろ自分自身の現実存在ではなくて、その他者の現実存在である。それだからこの彼岸は自分自身へと折り曲げられたものである；だがそのこの揚棄された存在は、それが自分自身と自分の他者との統一であり・したがって全体であるということに存するのであり、それゆえにこの彼岸は自立的な現実存在をもっており、本質的な自己内反省なのである。(p. 192)

長い引用になったが、要点は「本質的相関」が「現象」と「現実性」とのあいだに位置することである。「現象」と言えば、それは「本質の現象」として本質的であるが、しかしなお「本質」ならぬ「現象」として「本質が現象する」にすぎず、だから「現象」は「本質」の「他者」である。この「現象」に対して「本質的相関」は「二つの側面をもっている」が、この両側面は「自分自身の区別」であるから「自立的存立である」。そして「現実性」においては、その「相関」の両側面が「単一な・しっかりとした同一性」なのである。このような「現象」から「現実性」への進み行きにおいて、二つの自立態が相対して「本質的相関」なのである。

ではその「本質的相関」における進展は如何なるものか。

全体と諸部分との相関は直接的な相関である；反省した直接態と存在的な直接態とはそれだからこの相関においてはそれぞれが固有の自立態をもっている；だがそれらは本質的な相関のうちにあるので、それらの自立態はそれらの否定的統一にすぎない。さてこのことは力の発現においては定立されている；反省した統一はこの統一自身を外態へと移し変える運動として本質的に他者に成る運動である；だが外態はまた同じく反省した統一へと直接にとりもどされている；自立的な〔二つの〕力の区別は揚棄される；力の発現は反省した統一の自己自身との媒介にすぎない。空虚な透明な区別・映現が現存しているにすぎないが、この映現とは自立的な存立そのものであるところの媒介である。それら自身のもとで自己を揚棄する対立した〔二つの〕規定があるだけでなく、またそれらの規定の運動が移行する運動であるだけではなくて、一方ではそれから〔運動が〕はじまり・他在への移行がなされた直接態がそれ自身定立された直接態としてのみあるのであり、他方ではそのことによって〔二つの〕規定のそれぞれがそれらの直接態においてすでにそれぞれの他方の規定との統一であり、移行する運動はこのことによってまた同じく端的に自己を定立する自己への復帰なのである。(p. 209)

「空虚な透明な区別・映現が現存している」とあるが、するとその「映現」は「AであるA」・したがって「自立的な存立そのものであるところの媒介 die Vermittlung, welche das selbständige Bestehen selbst ist」である。すなわち「自立的 selbständig」であるのだから「それ自体 an sich」であり、つまりは「AはAである」なのだが、その媒介だから「AであるA」という次第である。そして「AであるA」において媒概念の虚偽に陥ることがないならば、直観を揚棄したその「内のもの」(媒介)において「外のもの」(二つのA)の「それぞれがそれらの直接態においてすでにそれぞれの他方の規定との統一である」。すなわち「外のものと内のものとの相関」である。

(五)

「本質的相関」の瞥見に続いては、その論理の『資本論』において如何様に展開しているのか、これも要点に限って見ておこう。

第一の「全体と諸部分との相関」は、それとの対応が『資本論』「価値の尺度」節に見出せる。

金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、すなわち、諸商品価値を、質的に等しく量的に比較可能な同名の大きさとして表わすことにある。こうして金は、価値の一般的尺度として機能し、そしてもっぱらこの機能によってはじめて、独自の等価物商品

である金がなによりもまず貨幣になる。(p. 161)

けれども

価値尺度機能のためには、ただ表象されただけの貨幣が役立つとはいえ、価格はまったく実在的な貨幣材料に依存している。たとえば、一トンの鉄に含まれる価値、すなわち人間的労働の一定分量が、等しい量の労働を含む貨幣商品の表象された一定分量によって表現される。したがって、金、銀、銅のどれが価値尺度として使われるかに従って、同じ一トンの鉄の価値はまったく異なる価格表現を受け取るのであり、言い換えれば、金、銀、銅のまったく異なる量によって表象されるのである。

そこで例えば「金価格」と並んで「銀価格」というものが生じる。

それゆえ、二つの異なった商品、たとえば金と銀とが同時に価値尺度として使われれば、すべての商品は二通りの異なる価格表現、すなわち金価格と銀価格とをもつことになり、金にたいする銀の価値比率が不変のままである限り、たとえば一対一五である限り、両者は平穩無事に共存する。しかし、この価値比率に変動が生じるたびに、商品の金価格と銀価格との比率が攪乱され、こうして、価値尺度の二重化はその機能と矛盾するということが、事実によって証明される。(p. 164)

すると貨幣は、一方「価値尺度としてのその機能 seine Funktion als Werthmaß」において「全体」であり、他方「価格の度量基準としてのその機能 seine Funktion als Maßstab der Preise」において「諸部分」である。『資本論』が注として引く『経済学批判』は説いている。

金と銀とが法律上貨幣として、すなわち価値尺度として並存する場合には、両者を一つの同じ物質として取り扱おうとするむだな試みが、つねに行なわれてきた。同じ労働時間が相変わらず同じ比率の金と銀とに対象化されているに違いないと想定することは、事実上、銀と金とが同じ物質であり、かつ、価値の低いほうの金属である銀の一定量が一定の金量の不変の一部をなしていると想定することである。(邦訳『全集』13巻 p. 58)

次に「力とその発現との相関」の論理は、これを『資本論』「流通手段」節に認めることができる。「絶対的に譲渡されうる商品 die absolut veräußerliche Waare」(p. 187)である貨幣は「商品が立ちのいた流通上の場所につねに沈殿する」(p. 191)。すなわち「貨幣の通流」だが、そこでは「力」が次のように現われる。

貨幣の通流は、同じ過程の不断の単調な反復を示す。商品につねに売り手の側にあり、貨幣はつねに購買手段として買い手の側にある。貨幣は、商品の価格を実現することによって、購買手段として機能する。貨幣は、商品の価格を実現することによって、商品を売り手の手から買い手の手に移し、他方、同時に、自分は買い手の手から遠ざかって売り手の手に移り、別の

商品についてまた同じ過程を繰り返す。貨幣の運動のこの一面的な形態が商品の二面的な形態運動〔形態上の変化〕から生じているということは、おおい隠されている。商品流通そのものの本性が、それと反対の外観を生み出す。商品の第一の変態は、貨幣の運動としてだけでなく、商品自身の運動としても目に見えるが、商品の第二の変態は、ただ貨幣の運動としてしか目には見えない。商品は、その流通の前半においては、貨幣と場所を換える。In ihrer ersten Circulationshälfte wechselt die Waare den Platz mit dem Geld. それと同時に、商品の使用姿態は、流通から脱落して消費にはいる。商品の価値姿態または貨幣仮面が商品に取って代わる。流通の後半を、商品は、もはやそれ自身の生まれながらの外皮ではなく、金の外皮に包まれて通り抜ける。それとともに、運動の連続性はまったく貨幣の側に帰することになり、商品にとっては二つの相対立する過程を含むその同じ運動が、貨幣自身の運動としては、つねに同じ過程を、すなわち貨幣がつねに別の商品と行なう場所変換を、含む。それゆえ、商品流通の結果である別の商品による商品の置き換えは、商品自身の形態変換によって媒介されるのではなく、流通手段としての貨幣の機能によって媒介されるものとして現われ、流通手段としての貨幣が、それ自体としては運動しない諸商品を流通させ、諸商品を、それらが非使用価値である人の手からそれらが使用価値である人の手へと——つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に——移すものとして現われる。貨幣は、たえず商品の流通場所で商品に取って代わり、それによって貨幣自身の出発点から遠ざかることにより、諸商品を絶えず流通部面から遠ざける。それゆえ、貨幣の運動は商品流通の表現にすぎないにもかかわらず、逆に、商品流通が貨幣の運動の結果にすぎないものとして現われるのである。(p. 195)

このように、「貨幣の運動は商品流通の表現 Aus-druck」・「外面態 Äußerlichkeit」である。

最後に「外のものとの内のものとの相関」節に対応するのは『資本論』の「貨幣」節である。

支払手段としての貨幣の機能は、一つの媒介されない〔直接的〕矛盾を含んでいる。諸支払いが相殺される限り、貨幣はただ観念的に、計算貨幣または価値尺度として機能するだけである。現実の支払いが行なわれなければならない限りでは、貨幣は、流通手段として、すなわち、素材変換のただ一時的媒介的な形態として登場するのではなく、社会的労働の個別的な化身、交換価値の自立的な定在、絶対的商品として登場する。この矛盾は、生産恐慌・商業恐慌中の貨幣恐慌と呼ばれる時点で爆発する。貨幣恐慌が起きるのは、諸支払いの過程的な連鎖と諸支払いの相殺の人為的制度とが十分に発達している場合だけである。この機構の比較的全般的な攪乱が起きれば、それがどこから生じようとも、貨幣は、突然かつ媒介なしに、計算貨幣という観念的な姿態からかたい貨幣に急変する。それは、卑俗な商品によっては代わりえないものになる。商品の使用価値は無価値になり、商品の価値はそれ自身の価値形態をまえにして姿を消す。つい先ほどまで、ブルジョアは、繁榮に酔いしれ、蒙ひらを啓くとばかりにうぬぼれて、貨幣などは空虚な妄想だと宣言していた。商品だけが貨幣だ、と。ところがいまや世界市場は、貨幣だけが商品だ！ という声が響き渡る。鹿が清水を慕いあえぐように、ブルジョアの魂も貨幣を、この唯一の富を求めて慕いあえぐ。恐慌においては、商品とその価値姿態である貨幣との対立は絶対的矛盾にまで高められる。それゆえまた、この場合には貨幣の現象形態はなんであろうとかまわない。支払いに用いられるのが、金であろうと、銀行券などの信用貨幣であ

ろうと、貨幣飢饉^{ききん}は貨幣飢饉である。(p. 233)

つまり「貨幣」は「支払手段」であることにおいて「内のもの（価値尺度）と外のもの（流通手段）との相関（絶対的商品）」なのである。

以上瞥見した論理的な対応が、さらに詳細に『資本論』でどのように展開されているか、とりわけ同語反復と矛盾の絡み合いの論理は如何様であるか、次回からはその具体を見てゆきたい。

(未完)

テキスト：本稿で用いる『資本論』および『大論理学』のテキストは次である。

Marx, K., *Das Kapital*, 1991, Diez, Berlin. (資本論翻訳委員会訳『資本論』第1・2分冊 1982～3年 新日本出版社)

Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik II*, 1986, Suhrkamp, Frankfurt am Main. (寺沢恒信訳『大論理学』2 1983年 以文社)

なお引用に際しては、それぞれの邦訳文を借用している。

注

- 1) 校正の時点では前首相。それにしてもこの総選挙を経ていや増したきな臭さはどうしたことか。領海侵犯と領空侵犯とでは次元が異なるという。無論そのことを知ってのことだろう、彼の国は調査機を飛ばし、応じて此の国は軍機を発進させる。すると待ってましたとばかり、当方も軍機を出せとの強い意見が彼の国から聞こえてくる。何れの国も民の多くは戦火なぞ望むまいが、自国の実力を試してみたい誘惑が指導層の一部に存することでは共通しよう。ともあれかかるきな臭さの出来する上で、前首相の党派の失政は寄与するに大であった。独りよがりな「決める政治」への失望は、政権交代のための授業料としても値が張りすぎた。同時に、反対は唱えるものの現実への影響皆無と言える小党派も、その無力であることにおいて応分の責任が問われよう。「終始一貫」と言えば聞こえはよいが、これもまた独善の別称にすぎないと民は考えている。結局、大は大なりに、小は小なりに、自らそのように有ることで既得の権益を享受していたのではないか。政治党派だけではあるまい。いわゆる革新的な諸々の潮流は今回足元を掬われたかに見えるが、しかしその彼らも各々の利得擁護に現を抜かしていただけと見るならば、その「生活保守」であることにおいて実は此の国の主流である。票を投じた先こそ異なれ、メンタリティに保革の別はない。一縷の救いは「保守」がまだ「生活保守」に留まっていること。真実守るべき価値は何か、そのために何をなすべきか。情性から脱して考えない限り、此の国はすでに「戦前」なのかもしれない。
- 2) 序に一言。大分以前のことが、『経営学論集』に苦言を呈したことがある。掲載論文の日本語があまりに拙いと思われたからだ。今回投稿するにあたり、久しぶりに近号を数冊読んだ。なかに相変わらずひどい日本語が混じっている。古希を過ぎた退職者がなお研究意欲を持ち続けていることには敬意を払う。けれどもその文章が例えば『知のツールボックス』の悪文例に採られる水準であれば、編集者は是正を勧告した方がよい。『論集』のレベルアップは学部の活性化にプラスするのだから。もっとも定期刊行の体裁を保つ上で退職者の投稿は不可欠というのなら、現役としても大きな口は叩けない。実際『経済学論集』や『商学論集』に比べ、『経営学論集』の頁数は少なめだ。万年准教授を決め込むなどはすでに論外、質量両面にわたる研究活動の低調を、わが同僚の思うや如何。
- 3) 『資本論』に次の叙述が見出される。論理においては同一であろう。

新たな資本は、いずれも、まずもって、いまなお貨幣——一定の諸過程を経てみずからを資本に転化すべき——として、舞台に、すなわち商品市場、労働市場、または貨幣市場という市場に登場する。Jedes neue Kapital betritt in erster Instanz die Bühne, d.h. den Markt, Waarenmarkt, Arbeitsmarkt oder Geldmarkt, immer noch als das Geld, Geld,

das sich durch bestimmte Prozesse in Kapital verwandeln sollen. (p. 250)

- 4) 次のように説くこともできる。「Aはxである」のAは偶性個別者であり、「xはAである」のAは属性一般者である。それゆえ「AであるA」においては、先のAの偶性性格が後のAの一般者性格に規制されている。そしてそのように一般者に規制された個別者の指示機能において実体が指示されるのである。この指示を逆に見れば絶対的なものの開陳である。絶対的なものがかくして知られ、ここに認識は絶対知を手にする。
- 5) ラッセルの「確定記述」における一意性の条件は、これは廣松が「世人に追隨する」ことと別のことではあるまい。
- 6) 『大論理学』は説いている。

本質の運動は一般に概念への成である。内のものと外のものとの相関のうちには概念の本質的契機が、すなわち概念の諸規定は、それぞれの規定が直接に自分の他の規定としてあるだけでなく・全体の総体性としてもまたある、というぐあいに否定的統一のうちにあるというように定立されている、という概念の本質的契機が現われてきている。だがこの総体性は概念そのものにおいては普遍的なものであり、—— [これは] 内のものと外のものとの相関のうちにはまだ現存していない基礎 [である]。—— 内のものと外のものとの否定的同一性はこれらの [両] 規定の一方の他方への直接的反転であるが、この否定的同一性にはさきに事柄となづけられたあの基礎もまた欠けているのである。—— / ここにまだ事柄そのものの内容にみちた運動なしに定立されているような、形式の媒介されていない同一性はきわめて重要であり、注目すべきものである。この同一性はその端緒にあるような事柄のもとに現われてくる。こうして純粹存在は直接に無である。一般にあらゆる実在的なものはその端緒においてはそのような直接的にすぎない同一性である、というのはその端緒においてはあらゆる実在的なものは諸契機をまだ対立させたり展開したりしておらず、一面では外面態から自己をまだ内化しておらず、他面では内面態からその活動性によって自己をまだ外化しておらず・外に現わしていないからである；それだからそれは外のものに対する規定態としての内のものにすぎず、また内のものに対する規定態としての外のものにすぎない。それだからそれは一方では直接的な存在にすぎず、他方では、それがまた同じく発展の活動性となるべく否定態であるその限りで、それそのものがやっと内のものにすぎない。(p.212)

参考文献：引用に際し、邦訳文を適宜変更したことがある。

ウイトゲンシュタイン・奥雅博訳「ノルウェーでG.E. ムーアに対して口述されたノート」『ウイトゲンシュタイン全集』

1所収 1975年 大修館書店

カント・宇都宮芳明『純粹理性批判』上 2004年 以文社

ソシュール・小林英夫訳『一般言語学講義』1972年 岩波書店

廣松渉『もの・こと・ことば』1979年 勁草書房

森重敏『日本文法通論』1959年 風間書房